

## サーシャ・ソコロフの未研究初期作品群

奈倉有里

## 0-0. これまでの研究状況

サーシャ・ソコロフは亡命以前、1960年代末から1970年代初頭にかけて、ソヴィエト国内で新聞記者をしていた。そのこと自体はソコロフの半生について書かれた記述のなかで必ずと言って良いほど触れられているのだが、その内容については、詳細な研究はおろか正確な情報も不足しており、これまで本格的には追求されてこなかった。

ソコロフ初期作品の研究不足を端的に示す事実がある。2007年に発行された百科事典『文学と言語』<sup>1</sup>は、顔写真入りでソコロフの項目を設けているのだが、ここには、「ソコロフのデビューは1967年で、黒海沿岸の港町の地方紙「ノヴォロシスクの労働者」«Новороссийский рабочий»に掲載された『牛乳をもらいに』«За молоком»という短編作品である」と記載されている。<sup>2</sup>確かにソコロフは、1967年の6月から7月にかけて同紙に記事や随筆を書いている。しかし、短編『牛乳をもらいに』が掲載されたのは、その直後に移住したマリ自治区の地方紙「コルホーズナヤ・プラウダ」である。<sup>3</sup>つまりこの記述には、二点おかしいところがある。第一に、『牛乳をもらいに』の掲載誌名が間違っている。第二に、『牛乳をもらいに』は純粋なデビュー作とは言いがたい。確かに、記事や随筆ではなく、〈短編〉というジャンルを明示して掲載されたのはこの作品が初めてだが、それ以前にノヴォロシスクの地方紙に書いていた随筆のなかには、創作的な要素が強く、その後の作品との関連から見て非常に重要なものも含まれる。

ソコロフのデビュー作について誤った表記をしているのは、この百科辞典に限らない。実は、これとほぼ同じ内容の誤った記述が最初に見られるのは、バートン・ジョンソンの書いたバイオグラフィーなのだが、<sup>4</sup>これと同じ誤りは多くの事典や教科書の記述において今もって踏襲されており、<sup>5</sup>現在に至るまでそのまま流用または引用されている。<sup>6</sup>

<sup>1</sup> *Малофеева Н.Н.* (ред.) Энциклопедия «Литература и язык». М. 2007.

<sup>2</sup> Там же. С. 449.

<sup>3</sup> *Соколов А.* За молоком // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 12 декабря 1967. С. 4.

<sup>4</sup> *D. Barton Johnson*, “*Sasha Sokolov: A Literary Biography*,” *Canadian-American Slavic Studies* 21:3-4 (1987), p. 205.

<sup>5</sup> 例: *Буслакова Т.П.* Литература русского зарубежья. Высшая школа. М. 2009. С. 321.

<sup>6</sup> ソコロフ本人と交流のあったバートン・ジョンソンの書いたバイオグラフィーは、ソコロフの作家研究のさきがけとなる記念碑的な著作だが、同時に多くの箇所疑問点の残るものであり、ソコロフ自身このバイオグラフィーに対しては否定的な見方をしている。(インタビュー *Кручик И.* Саша

作家研究の立場から見た場合の重要な見落としはまだある。これまでの研究では、『ばかの学校』は、亡命以前はまったくの未発表であったとされてきた。しかし、『ばかの学校』第二章、小説内小説になっている「テラスで書いた短編集」の最初の短編『入隊』«В армию»は1968年にマリ自治区モルキ地方の「コルホーズナヤ・プラウダ」に掲載されている。<sup>7</sup>

これらは初期作品の研究不足を端的に表すことがらでもある。では何故このようなことが起きているのか。理由の一つとしては、ソコロフ本人が自らの初期作品についてあまり高い評価をしておらず、最近になって発行された作品集や全集にも、最初期に新聞に書いていた記事や短編は再録されていないということが挙げられる。また研究する側からも、ソ連の新聞に書いていたものだから、おそらくは、自由には書けなかった官僚の記事か、創作であっても編集や検閲の手が入っていてソコロフの作品として扱うことが難しいものばかりに違いない、といった推測がなされがちである。さらに、当時ソコロフは主に地方新聞を中心にロシア各地を転々としながら活動していたため、これらの初期作品群を読むためには該当すると思われる地域の新聞をくまなく調べていく必要があり、調査には少なからぬ時間を要する。

しかし仮に本人の評価が低かったとしても、いつまでも初期作品を無視し続けるわけにはいかない。またソコロフ自身にしても、決して全面的に自らの初期作品を否定しているわけではない。例えばあるインタビューでは、新聞、特に大手「文学ロシア」紙での仕事は、文章を書くいい修行になったこと、少なくとも職業的な自覚を持ってものを書くことの出発点であったことを語っている。さらに重要なのは、「マリの地方新聞では、テキストに改変を加えられることなく、作品をそのまま発表することが出来た」と、証言していることだ。<sup>8</sup> 無論この一言だけで、実際に当時ソコロフがまったく自由に作品を書いていたと断定することは出来ない。だが反対に、記者時代の初期作品を一括して、ソ連の厳しい体制下で思うように書けなかったテキスト群であり研究に値しない、としてしまうのは、あまりに杜撰である。

作家は突然変異で生まれるのではない。若き日に試行錯誤して書かれた文章は、規制された状況下であれ、いや、ともするとだからこそ、後世の研究にとっては、様々な軌跡を残した貴重な資料となりうる。これからのソコロフ研究を長い目で見ると、初期作品に目

---

Соколов «По мне многие скучают...» [<http://codistics.com/sakansky/paper/kruchik/igor06.htm>] 参照。以降 HP アドレスは全て 2011 年 7 月 15 日閲覧)。

<sup>7</sup> Соколов А. В армию // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 1 мая 1968. С. 4.

<sup>8</sup> «Интервью с Сашей Соколовым» [<http://vladkravchenko.livejournal.com/978.html>]. このインタビューは 1997 年にウラジーミル・トルストイ発行の文集 «Ясная поляна» № 2 に掲載された後、1995 年 «Литературная газета» № 7 (2 月 15 日号) に転載されたが、「Литературная газета」版はかなり省略された形で、最も完全な版はインタビューアのクラブチェンコが自身のホームページ上で公開した。

を通さずに作家研究を進めることは、今後難しくなるだろう。

### 0-1. 『ばかの学校』と初期作品

ソコロフ初期作品の重要性は、ソヴィエト在住時に書かれ、亡命直後に発表された作品《Школа для дураков》『ばかの学校』との関連性からも見ていくことが出来る。

前提として触れておきたいのが、これまでに『ばかの学校』の作風について、ナボコフやジョイスとの影響関係や類似点が指摘されてきたことだ。例えば、A. ゴーリンは、よく類似の指摘されるナボコフとソコロフについて両者のテーマ性の類似を認めた上で、次のように述べている。『ばかの学校』は、ナボコフが高い評価を下したと常に結び付けられ、ナボコフの伝統を直に受け継ぐものと捉えられることもあった。しかし両者の言葉へのこだわりは、ナボコフが言葉を分解したり重ねたりと常に言葉に対して優位に立っているのに対し、ソコロフは言葉の自然の力に完全に身を任せているというように、言葉と向き合う姿勢が根本的に異なっている。<sup>9</sup>

またソコロフ本人は、『ばかの学校』を書いた時点でナボコフを読んだことはなく、直接の影響はありえないこと、しかし何度か自分でも驚くほどの類似を発見したことを語っている。<sup>10</sup> ソコロフはナボコフの他にも、類似の指摘されたジョイス、ボルヘス、ベールイらについてことごとく、「亡命前には読んでおらず、『ばかの学校』への直接の影響はありえない」と述べている。<sup>11</sup> 他の作家からの影響について、作家本人の証言をそのまま受け止めるべきではない。とりわけ類似作品が偶然のように同時発生する二十世紀文学においては、影響関係をはじめから問題にせず、類似を手がかりとして複数作家の作品を研究することも出来る。

だがその前に『ばかの学校』の文体について、現段階で作家・批評家や研究者のなかに、いくつか異なる見解が存在していることについても、指摘しておく必要がある。ナボコフ、ベールイらの文体にも通ずる言語実験的小説であると紹介されることも多いなかで、異論として興味深いのがヨシフ・プロツキイの意見だ。『ばかの学校』の原稿を受け取ったアルデイス出版のカール・プロッファーは、それをナボコフに見せるより以前に、まずプロツキイに見せている。プロツキイは結果的には自らの書評を取り下げてしまったが、その後のインタビューで『ばかの学校』について、「文体としては、1968年頃のソ連文学とし

<sup>9</sup> Зорин А. Насылающий вечер // Новый мир. М. 1989. № 12. С. 250-251.

<sup>10</sup> <http://vladkravchenko.livejournal.com/978.html>

<sup>11</sup> Глэд Дж. Беседы в изгнании: Русское литературное зарубежье // Книжная палата. М. 1991. С. 198. また沼野充義による紹介のなかでも、ソコロフがベールイとの類似を指摘された際、やはり亡命後に類似を見つけて驚いたと語っていたことが指摘されている。『永遠の一駅手前』作品社、1989年、53頁。

てごくありふれた文体だった」と語っている。<sup>12</sup>

これはさすがに少し極端な言い方かもしれないが、ソコロフ自身、亡命以前に好きだった作家としてユーリイ・カザコフやヘミングウェイの名を挙げていて、<sup>13</sup> この読書の好みは確かに、当時「ユーノスチ」誌や「外国文学」誌を愛読していた、比較的自由な表現を好むごく普通のソヴィエト青年のものでもある。しかしだからといって、カザコフやヘミングウェイと『ばかの学校』とを直接の影響関係で結ぶのは難しいだろう。

だが、これらのことを踏まえた上で亡命までにソコロフ自身を書いたものを見直す時、『ばかの学校』に何が影響したか、という問題は解決に向かって大きく前進する。

ソコロフは新聞記者として働かなかで、何を讀み、何を書いていたのか。何処に住み、何を見ながら『ばかの学校』の構想を練っていたのか。それらを丁寧に見ていくことで浮かび上がってくるものは何か。そこに、『ばかの学校』に大きな影響を与えた、ナボコフでもジョイスでもボルヘスでもベールイでもない、別の何かが見出せるのではないだろうか。

## 1-0. 君と僕の始まり

頭脳の發育に遅れのある子供が通う学校の生徒である主人公は、精神が二分するという症状を患っていて、自分（たち？）は二人だと思っている。（タチャーナ・トルスタヤ）<sup>14</sup>

『ばかの学校』の一人称が特殊であるということについては、これまで度々指摘されてきた。語り手は自らを「二人＝僕たち」だと思っていて、「僕」が語っていると思ったら、その僕に「君」と話しかけるもう一人の「僕」が出てきたり、そうかと思えばまた「僕たち」に戻ったりと、語り手の一人称には一貫性が無い。

この問題に触れるにあたって確認しておきたいのは、「僕」と「もう一人の僕」に人格的な（あるいはそれを言葉として表す文体的な）差異があるかどうかだ。もし「僕」のなかにある特定の人格を持った「僕」と、それとは違う人格の「もう一人の僕」がいて、その二人が会話しているというのなら、両者の違いを明確化することで、作品の持つテーマ性がある程度見えてくるかもしれない。しかし、この作品は違う。「僕」が話しているとき、それが「僕」なのか「もう一人の僕」なのかは常に判別がつかない。いや、もっと言

<sup>12</sup> Бродский И. Большая книга интервью. Захаров. М. 2000. С.590.

<sup>13</sup> Глэд Дж. Беседы в изгнании: Русское литературное зарубежье // Книжная палата. М. 1991. С. 196.

<sup>14</sup> «У героя книги, ученика школы для умственно отсталых, раздвоение психики, он считает, что его (их?) двое.» (Толстая Т.Н. Предисловие к отрывкам из романа «Школа для дураков» // Огонек. 1988. № 33. С. 21.)

えば、「僕」と「もう一人の僕」という分け方はあくまでも作中で「僕」と「僕」が会話をしていることを表すための恣意的な解釈であって、作品のなかに、この箇所は「いつもの僕」ではなく「もう一人の僕」が語っているのだ、と明確に判断できるような箇所はない。

具体的にはこういうことだ。「僕」は確かに、もう一人の「僕」という一人称の誰かと会話をしているし、「もう一人の僕」という言い方自体も、意図的に強調された形で何度か登場する。<sup>15</sup> しかし、実際に「僕」と「僕」が会話をしていると思われる箇所では、会話であることを示す記号や改行はなく、一方がもう一方に対してある主張をしているかと思えば、いつのまにかその内容がもう一方と同じ主張になっている、という具合で、どこまでが一人の台詞でどこまでがもう一人の台詞なのか判別しづらくなっている。ではなぜこの文章は「二者の対話」であるように見えるのか。その理由は主に二つある。一つは、語り手が「僕」と「君」、そして「僕たち二人」という言い方を一人称として用いている点、もう一つは、その語り手が常に何かを問いそれに答えるという形式で話を進めていく点だ。

それならば、二人が対話しているというよりは、一人の思考が対話形式で進んでいると考えたほうが的確かもしれない。だが、単なる自問自答なら誰もがすることであり、内面を綴った文章としても、まったくありふれた文章になる。試しに、語り手が「対話」している箇所から「君」という言葉を削り取り、一人称単数で統一した自問自答的対話文にしてみると、それがよくわかる。つまり、「君はその家の色だって、覚えてるんじゃないか？ うん、覚えてるよ。」ではなく、「僕はその家の色を覚えてるだろうか。うん、覚えてるぞ。」といった具合に。<sup>16</sup> しかし小説全体を通して見ると、このような単純な書き換えが有効な箇所はそう多くはない。例えば、「僕」と「もう一人の僕」が、お互いに何かに対する責任を「もう一人」のせいにしようとしていたり、激しく口論していたりする場面では、人称をすべて「僕」に置き換えて自問自答の文章にしてみたところで、やはり違和感が残る。

この一人称の特殊性は、『ばかの学校』のナラトロジーに関わる重要な問題だが、一般に、「自分を二人だと思ひ込む知的障害児」という設定が見事に活かされた巧妙な文体として捉えられることが多い。

<sup>15</sup> «Да, нет, отвечал я *другому* себе (хотя доктор Заузе пытался доказать мне, будто никакого *другого* меня не существует, я не склонен доверять его ни на чем не основанным утверждениям), да, в лодке меня нету, но зато там, в лодке, лежит белая речная лилия...» (Сokolov С. Школа для дураков. Между собакой и волком. Палисандрия. Эссе. СПб., 2009. С. 26. 本論文において『ばかの学校』の引用は全てこの2009年ペテルブルグ版を底本とする。以下、底本からの引用はページ数のみ。)

<sup>16</sup> 比較箇所原文: «вероятно **ты** запомнил их цвет, или, возможно, **ты знаешь** людей, которые жили в тех домах на той станции? Да, я знаю...» (С.9.) 変更後の一例: «...вероятно **я** запомнил их цвет, или, возможно, **я знаю** людей, которые жили в тех домах на той станции? Да, я знаю...»

しかし、ソコロフの初期作品を丁寧に見ていくと、知的障害児という設定とは無関係なはずの多くの作品に、『ばかの学校』と非常によく似た語りが登場し、「知的障害児の内面の対話」という設定がむしろ、『ばかの学校』以前からソコロフが好んでいた語りの調子を活かすために生まれた設定である可能性が出てくる。これを仮に〈君と僕の始まり〉とし、次に例を挙げて解説する。

### 1-1. 覚える？ ——ルミャンツェヴァの書評

過去の回想中に「あれは何々だったっけ?」「いや、何々だよ」といった記憶内容の確認を、「僕」と「もう一人の僕」が行っている箇所がある。これは、先ほどの例とも似ていて、人称のみを変化させ「あの人の名前、何だったっけ……。いや、急には思い出せないな」という自問自答の文章に置き換えることもできる。ここでの「僕」と「もう一人の僕」が確かめ合っているのは、記憶の不確かな部分に関してのみであり、その他の部分には特に何も両者を隔てるものが無い。会話の調子は比較的穏やかだ。<sup>17</sup>

この「覚える?」という語りかけの用法には、形は似ているがニュアンスの異なる類似形が存在する。

覚えるかな、夕闇の頃、凍てつく墓地の空気に響くアコーディオンの音。線路からは鉄道の音が聞こえて、はるか遠く煌く街にかかる橋に、紫の火の粉を飛ばす路面電車葉がニワトコの枝の中を突き抜けて走って行く頃、市場から、空になった容器を乗せた手押し車が運ばれていく頃——その音もはっきりと聞こえる——ガシャガシャガシャ、金属容器のぶつかる音、馬の蹄が凍てつく砂利道を蹴っていく音、働く人々の怒鳴り声、笑い声、それは君の全然知らない人たちが彼らも君の事を知らない……。それでさ、君の弾いた**パルカローレ**が、夕闇の墓地、冷たい空気の中で、どんな風に響いたか覚える? <sup>18</sup> (強調原文)

こういった場合、文の趣旨は回想の内容を抒情的に伝えることであって、「覚えているか

<sup>17</sup> «Почтальон спокойно проезжал вдоль забора, за которым находилась дача соседа, — кстати, ты не помнишь его фамилию? Нет, так сразу не вспомнишь: плохая память на имена...» (С. 11.)

<sup>18</sup> «Ты помнишь, как звучит аккордеон на морозном воздухе кладбища ранним вечером, когда со стороны железной дороги доносятся звуки железной дороги, когда с далекого моста у самой черты города сыплются и сквозят в оголенных ветвях бузины фиолетовые трамвайные искры, а из магазина у рынка — ты хорошо слышишь и это — разнорабочие увозят на телеге ящики с пустыми бутылками; бутылки металлически лязгают и звенят, лошадь стучит подковами по ледяному булыжнику, а рабочие кричат и смеются — ты ничего не узнаешь и про этих рабочих, и они тоже ничего о тебе не узнают, — так помнишь ли ты, как звучит твоя *Баркаролла* на морозном воздухе кладбища ранним вечером?» (С. 78.)

どうか」という問いは二次的なものになっている。「覚えているかい」という問いかけのこのような使用法は、回想録や抒情詩などにおいて頻繁に見られるが、こういった質問の際、覚えているか否かという答えは必ずしも要求されていない。引用箇所の場合も、もしこの箇所だけを読むなら、特定の誰かに対する問いかけというより、叙情的な語りの回想文として捉えたほうが適格だろう。ところがここでは、この後にあえて、「どうしてそんなこと聞くんだよ、僕はもう、あの頃のことなんて思い出したくない、思い出すことに疲れちゃったんだよ」<sup>19</sup> と続けることで、「僕」と「もう一人の僕」の対話を成立させてしまう。そして、続けて「君」の行動を描写する。

君はどうやって悼む母のところに戻ったらいいのかもわからず、汽車の汽笛が聞こえるほうへ、路線のほうへと歩き出す。汽車、青い煙、汽笛、機械の音、青い……いや、黒い制帽をかぶった運転手さんが、運転席から覗いてる。前を見て横を見て、君に気づいて微笑む、運転手さんは口ひげを生やしていて、手を上のほうに伸ばしてる、きっとそこにはメーターとか信号装置とかがあるんだろうね。それから君の予測通り、すぐにもう一度汽笛が鳴り、汽車は目を覚まして動き出し、後ろの車両を引っ張っていく……<sup>20</sup>

この「君」は、自分以外の誰かなのか、それとも自分なのか。ゲーテの *Warte nur balde / Ruhest du auch* の *du* (またはレールモントフによるその露訳 *Подожди немного / Отдохнешь и ты* の *ты*) が、「君」を指すのか「我」を指すのか、といった議論とも共通する問題だが、この様な場合、語り手が抒情的な心情の元に、周囲の存在を自我の存在より大きなものとして実感していて、その周囲の目線から自分に語りかけている、といった解釈も可能になってくる。周囲の詩情を敏感に感じ取る、抒情的な心情の元に自らを見る時、「僕」は「君」となり得る。このような「君」の用法を仮に、〈抒情的語りかけの「君」〉としよう。

実は、ソコロフは新聞記者時代に、これと非常によく似た文章を書いている。

覚えているかな、君の田舎で、夏、鳥たちがいて、柳の古木が生えていて、ライ麦畑の上空の……、もしくはロシア全土の上空の……夕暮れの空が真っ赤に染まっていたこと。明日は、戦争になる。いつの日か君は、ヴォルガ流域やシベリアに住むことになる。(中略) そのもつと後、大きくなったら、君は詩を書くことになるんだ……<sup>21</sup>

<sup>19</sup> «Зачем ты спрашиваешь меня об этом, мне так неприятно вспоминать то время, я устал вспоминать его…» (С. 78.)

<sup>20</sup> С. 76.

<sup>21</sup> «Помнишь — в твоей деревне, там, где лето, и птицы, старые ивовые деревья, там, над ржаным

これは1970年にソコロフが「文学ロシア」紙に書いた、マイヤ・ルミャンツェヴァの詩集の書評だ。ソコロフはルミャンツェヴァの幼少期の描写を、上のように「覚えているかい」という語りかけで始めているのだが、当然、ソコロフはルミャンツェヴァと共通の記憶について語っているわけではない。また、これも当然だが、ルミャンツェヴァの自我が分裂してもう一人の彼女が「君」という呼びかけで自分に話しかけているわけでもない。この文章の趣旨はルミャンツェヴァの幼少期を抒情的に語ることにある。

ただ、この書評は語りの調子や内容こそ『ばかの学校』によく似ているとはいえ、書評という枠内で著者が別の人物（ルミャンツェヴァ）に語りかけているに過ぎず、これだけを『ばかの学校』と比較した場合、やはり「知的障害児の内面の対話」という後者の設定が目立って特異である。だが実はこのほかに、語り手の設定に焦点を当てたときに『ばかの学校』により近い作品もいくつかある。

## 1-2. 幼い頃の「君」へ —— 『虹の全色』

『ばかの学校』で「僕」と「もう一人の僕」が語り合っているとき、二人は基本的に常に同じ時間に存在しながら過去を回想しているのであって、過去にいる自分に話しかけたりはしないのだが、一箇所例外がある。それは、アカトフ博士との会話中に語り手が突然話を中断し、幼い頃の回想を始める場面だ。ここで語り手は、自分が病気であることを知った頃の思い出を語る。

天気のこと。特に、夕闇のこと。冬の夕闇に包まれた、幼い君へ。(中略) 宿題もやってない。心と、しんけいけいとうが、夢見がちでからっぽ。全身が、悲しみでいっぱいだ。君は幼い。だけど知ってしまった、もう知ってしまったんだ。母さんが言った。「大丈夫よ、そのうち治るわ」って。<sup>22</sup>

この箇所は、まず、はっきりと幼少の頃だということがわかる点、また、その幼少の頃の

---

полем — или над всей Россией — небо на закате багрово: завтра будет война. Когда-нибудь ты станешь жить на Волге или в Сибири... (...) И позже, когда вырастешь, ты напишешь стихи...» *Соколов А.* О людях, отстоящих лето // Литературная Россия. 1970. № 51. С. 4.

<sup>22</sup> «О погоде. Главным образом — о сумерках. Зимой в сумерках маленькому тебе. (...) Уроки не сделаны. Мечтательная пустота сердца, солнечного сплетения. Грусть всего человека. Ты маленький. Но знаешь, уже знаешь. Мама сказала: и это пройдет.» (С. 113.) Солнечное сплетение (solar plexus) は「腹腔神経叢」だが、ここでは Солнечное も сплетение も幼児に覚えやすい言葉であることを重視し、仮に「しんけいけいとう」とした。



自分と今の自分が生きている時間が違うことを区別した上で幼少の頃の自分に話しかけているという点で、小説全体のほかの部分の語りとは明確に異なっている。

君はいったい誰なの？ 君は知らないさ。時間が経てばわかるよ、記憶のビーズをつないでいけばね。<sup>23</sup>

このように語り手は何度も、「君はまだ知らない」と繰り返す。語りかけられた幼い「僕」は、その後の記憶をまだ持たない。

実はソコロフは新聞記者時代、これに近い叙述を試みていた。それが、『虹の全色』*«Все цвета радуги»* という、戦争で視力を失った作曲家についての随筆だ。この作品はコーナーの規定上「随筆」と銘打ってはいるものの、その構成は同誌に掲載されていた他の随筆と比べてかなり複雑で、通常の随筆の枠内に収まるものではない。

戦前。マリ地方の田舎。もし君が二、三曲、簡単な曲をアコーディオンで弾けるなら、自分のことを、委員長の次にすごい人だと思ってい。 <sup>24</sup>

ここで「君」と言われているのは少年の頃の、視力を失う前の作曲家だ。そして「君」＝将来の作曲家が、当時独学で音楽を習得していたということが語られるが、そこに突然、未来からやってきた人物が登場してしまう。

君は十七歳、僕は二十歳を過ぎてる、でも戦前の今は、僕はまだ生まれてない、僕は未来から、君と話をしに来たんだよ。今の僕は君より年上だ、でも混乱しないでほしいんだけど、僕はまだ生まれてないんだ。<sup>25</sup>

この人物は、設定上は随筆の著者なのだが、17歳当時の作曲家の身に起こっていることを、将来の作曲家自身とかなり近い目線から語っている。さらに、

---

<sup>23</sup> «Кто же ты сам? Не знаешь. Только узнаешь потом, нанизывая бусинки памяти.» (С. 113.)

<sup>24</sup> «Перед войной. Марийская деревня. И если ты можешь играть на гармошке два или три простые песни, считай себя первым после председателя.» (Соколов А. Все цвета радуги // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 13 янв.1968 г. С. 2-4.)

<sup>25</sup> «Тебе семнадцать, а мне уже больше двадцати, но сейчас, перед войной, я еще не родился, просто я пришел из будущих лет поговорить с тобой. Сейчас я старше тебя, но не теряйся, я еще не родился.» (Там же.)

だけど君はまだ、これから起こる戦争の事なんて何も知らない。<sup>26</sup>

と、未来のことについて「君はまだ知らないけど……」と語りかける文も、『ばかの学校』内の、過去の自分に話しかけている語り手の文章に酷似している。この「随筆」は、この後も途中で著者が突然自分の子供時代の思い出を語りだしたり、また作曲家の話に戻ったりという構成の複雑さを見せ、『ばかの学校』との類似箇所は多い。『ばかの学校』と違う点を上げるなら、この随筆のほうが説明的な文章が多く、「僕は未来からやって来たんだ」等と逐一説明したり、「混乱しないんでほしいんだけど」などと念を押ししたりしているのに対し、『ばかの学校』では、そういった説明がほとんどまったく無いという点だ。

だがそれにしても、コルホーズ新聞のまわりの記事や随筆に比べ、この随筆は明らかに特殊でわかりづらく、そのため掲載の際には編集者が、「この随筆は複雑で、至るところで叙述が逸脱していますが、これはマリ自治区の作曲家、M.ステパノフについての話です」という前置きを付記し、話が逸脱する箇所のフォントを変えた上で、これを掲載している。

しかし注目したいのは、このように作品によっては編集者による前置きこそあるものの、既に述べたように後にソコロフ自身が、「マリの新聞では、テキストに改変を加えられることなく作品を発表することが出来た」と証言していること、<sup>27</sup>そして、実際にこの時期の作品群自体、創作性の強いテキストが多いということで、マリ自治区の新聞に発表されたソコロフ初期作品の重要性はまずそこにある。というのも、後にモスクワの新聞や雑誌に発表した作品では、そうはいかなくなってしまうからだ。

例えば、随筆『虹の全色』は、同年9月、当時モスクワで13,300部発行されていた視覚障害者のための雑誌「視覚障害者の生活」«Жизнь слепых»に再掲載されるが、テキストはだいぶ縮小改変されている。また、その後1971年には同誌の行ったコンクールで、ソコロフの短編『老いた操舵手』«Старый штурман»が、「視覚障害者について書かれた短編最優秀賞」を受賞する。これが、ソコロフの作品のなかで最初の文学賞受賞作となるのだが、その作品が掲載された際に受賞作のテキストに勝手に手を加えられたことは、亡命を決意するひとつのきっかけともなった。<sup>28</sup>

さて、「君と僕」の問題に戻ろう。先ほど『ばかの学校』内で、過去の「君」との対話が登場するのは一箇所のみだと書いた。確かに、「幼い君と大きくなった自分」という書き方をしているのはあの部分だけなのだが、もう少し広い意味で考えると、大人になった作者が語り手に語りかけている部分も、構図としては随筆『虹の全色』とよく似ている。

<sup>26</sup> «Но ведь ты еще ничего не знаешь о будущей войне.» (Там же.)

<sup>27</sup> <http://vladkravchenko.livejournal.com/978.html> (このインタビューについては註8を参照)

<sup>28</sup> Соколов С. Я вернулся, чтобы найти потерянное // Родина. 1991. № 4. С. 14.

いや、もっと広く、『ばかの学校』の構想そのものを、大人になった作者が養護学校に通っていた頃の自分＝語り手になりきって回想と逸脱を続けるものと捉えれば、そのアイデアの萌芽を『虹の全色』に見出すことも出来る。いずれにしても、初期作品のなかに、こういった過去の「君」との対話がすでに見られることは、注目に値するだろう。

### 1-3. 時を越えた語り —— 『彼の運命の時』

初期作品と『ばかの学校』の語りとの共通点を探るとき、もうひとつ重要な短編がある。それが、『彼の運命の時』«Время его судьбы»だ。<sup>29</sup> これは、この短編が書かれた1960年代後半から20年以上前の戦時中を回想している外科医の話で、『虹の全色』と同じ「モルキの人々」コーナーに掲載されている。

この『彼の運命の時』は、『虹の全色』に比べると構成は単純で、手紙を読みながら回想をしているというだけなのだが、短編中盤で突然叙述が逸脱し、「時間とは何か」を延々と語りだす。しばらくすると元の話に戻るのだが、この逸脱部分は短編全体の1/6程を占めている。そしてこの部分は、『ばかの学校』内の時間に関する叙述と比較したとき、非常に興味深い類似を見せる。その中核をなすのが次の一文だ。

だけでもしかして、人間の外には時間なんて存在しないんじゃないか？もしかして、時間っていうのは、君自身なんじゃないか？<sup>30</sup>

人間の存在を第一に考え、時間をその人間に付属するものと考えer見方は、ワイリとゲニスのいう『ばかの学校』における〈同時性〉の根底にあるとも考えられる。<sup>31</sup> 時間を、あくまでも人に属するものと捉えることで、その人の身に起きたすべての出来事を、現在のその人という一つの「時間」に置き換えてしまう。言い換えるなら、人は常にその人に起きたすべての出来事を「同時に」内包している、という見方だ。

『ばかの学校』との類似はまだある。実はこの『彼の運命の時』の叙述は、時間について語った逸脱部分からもとの話に戻るまでの間の数行でさらに多少脱線し、そこで短編本文とまったくかかわりの無い、川辺の描写が入る。

川辺の砂の上を歩いているときに、振り向いて、自分の足跡を見てごらん。それは砂浜の上

<sup>29</sup> Соколов А. Время его судьбы // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 20 янв. 1968. С. 3-4.

<sup>30</sup> «А может быть времени вне людей не существует? Может быть время — это ты сам?» (Там же.)

<sup>31</sup> Вайль П.Л., Генис А.А. Уроки школы для дураков // Литературное обозрение. 1993. № 1-2. С. 14.

に残された、君の時間の欠片なんだよ。<sup>32</sup>

一方、『ばかの学校』には、語り手が「川辺のスイレンになった」と主張する箇所がある。スイレンになった語り手は、ボートを降りて川辺を歩くが、そこにはもう足跡がつかない。

僕は何か砂の上を歩いて、振り向いてみた。砂の上に僕の足跡らしいものはまったく無かった……<sup>33</sup>

こうして並列してみると、まるで『彼の運命の時』の著者が、『ばかの学校』の語り手に話しかけ、語り手がそれを受けて振り向き、足跡（＝自分の時間の一部）を確認しているように見える。という、多少行き過ぎた解釈と思われるかもしれないが、実はそうでもない。両者はこの箇所だけではなく、全体的に見ると、思考の順番までもが平行関係にあるのだ。そもそも、『ばかの学校』で語り手が「スイレンになった」という主張は、

よく覚えてるんだ。僕はオールを漕ぐ手を止めて、ボートに座ってた。(中略) オールを掴もうとして手を伸ばしたけど、だめだった。オールのもち手は見えなのに、掌に感覚がなくて、木のオールがすーっと僕の指を、関節の骨を、すり抜けてしまった。(中略) そんなのって、幽霊よりたちが悪い。幽霊なら少なくとも、壁をすり抜けることが出来るけど、あの時の僕は壁なんかすり抜けられなかったはず。だって僕は消えて、何も残ってなかったんだから。<sup>34</sup>

と、自らが「消えてなくなる」ことと裏表一体の関係にある。先ほどの引用箇所でも、川辺の砂の上を歩いて振り向いて足跡がつかないことを確認したのは、自分が消えたことを確認するためだった。また、先ほどの『彼の運命の時』の引用箇所の前にあるのは、

もしも君が生きることをやめたら、君の時間は終わる。もしも地上の人間がいつべんに消えて

---

<sup>32</sup> «Когда ты идешь по песчаному берегу реки, оглянись и посмотри на следы своих ног — это отпечатались на песке кусочки твоего времени.» *Соколов*. *Время его судьбы*. С.3-4.

<sup>33</sup> «Я прошел по пляжу некоторое количество шагов и оглянулся: на песке не осталось ничего похожего на мои следы...» (С. 26.)

<sup>34</sup> «Хорошо помню, я сидел в лодке, бросив весла. (...) И попытался взять весла, протянул к ним руки, но ничего не получилось: я видел рукояти, но ладони мои не ощущали их, дерево гребей протекало через мои пальцы, через их фаланги, как песок, как воздух. (...) Это было хуже, чем если бы я стал призраком, потому что призрак, по крайней мере, может пройти сквозь стену, а я не прошел бы, мне было бы нечем пройти, от меня ведь ничего не осталось.» (С. 25-26.)

しまうなんてことがあったら、人々の時間、惑星の時間は止まって、死んでしまうことになる。

35

と、人がいなければ時間も無い、という考えを発展させ、「もし君がいなくなったら」という仮定をしている記述だ。

少し整理してみよう。つまりこういうことだ。短編『彼の運命の時』で生まれた、「人間の外に時間なんて存在しないんじゃないだろうか」→「人がいなければ時間も無い」→「川辺の砂浜につく足跡は君の時間が存在している証拠だ」という叙述の流れは、『ばかの学校』において、「語り手が消えてしまう」→「語り手の時間がなくなる」→「川辺の砂浜に足跡がつかなくなる」という流れの元になっている、と考えられるのではないか。また、『彼の運命の時』でこういった逸脱が始まる背景には、主人公である外科医が人の生と死に思いを馳せている、という設定があり、これもまた、『ばかの学校』で語り手が消えてしまうことの背景にある根源的な問いに重なる。

しかし、『ばかの学校』との関連を探る上でさらに重要なのは、この短編のタイトルにもなっている「運命の時」が、何を指しているのか、ということだ。

運命の時というのは、君がこの地上に生きていた時間のことだ。たとえ君が自ら望んで生まれてきたのではないにしても、君は生きなければならない。君の時間を捧げて、その借財を人々に返さなければならない。なぜならば君は彼らの一部であり、君の運命は人類全体の運命の一部なのだから。きっと、いつかどこかで君の時間が始まり、遅かれ早かれ、その時間は終わりを告げると、そう決まっていたのだろう、そうなるべくしてなったのだろう……。<sup>36</sup>

人がこの地に生を受け、生きているその期間全てが、「運命の時」である。というそれは、今まで見てきたような、時間をあくまでも人に属するものとする見方に近いとも捉えられるが、その後の叙述で、「それは他の人々の時間の一部でもあり、人は自らの時間をその全体に捧げるんだ」というような姿勢や、生死に対する穏やかで雄大な見方は、『ばかの学校』の最後で、ノルヴェゴフの死を認めた後の語り手が突如として話しだす、ツツ

<sup>35</sup> «И если ты перестал жить, то твоё время окончилось, а если на земле вдруг исчезнут все люди, то время людей, время планеты остановится — погибнет.» *Соколов*. *Время его судьбы*. С.3-4.

<sup>36</sup> «Время судьбы — это время, которое ты был на земле. И пусть ты появился на свет не по своей воле — ты обязан жить и отдать своё время, вернуть свой долг людям, ибо ты частица их, и твоё судьба — частица судьбы всего человечества. Так уж было, наверное, необходимо, так должно было случиться, чтобы где-то, когда-то, началось твоё время, как необходимо и то, чтобы рано или поздно оно окончилось...» *Соколов*. *Время его судьбы*. С.3-4.

ジの生態から見た生と死の考察にも重なる。<sup>37</sup> 短編『彼の運命の時』は、『ばかの学校』のアイデアの萌芽としてだけではなく、『ばかの学校』終盤で、ツツジの生態から展開されていた生命観を裏付ける作品としても重要だと言えるだろう。

## 2. 音とテーマ —— 『風のある夕暮れに』

短編『彼の運命の時』には、「時間」以外にもうひとつ、注目すべき点がある。それは、この短編内に「白柳の枝」ветки ветел や、「しなやかな枝の揺れに」в колебании гибких веток といった表現が見られることだ。

『ばかの学校』テキストでは、白柳 ветла は、ヴェータ Вета と枝 ветка を、音的にも意味的にもつなぐ非常に重要な役割を果たしている。<sup>38</sup> 似た音の言葉を概して意識的に重ねるソコロフの手法のさきがけとして、『彼の運命の時』にこれらの表現が登場することは注目に値する。さらに、このような言葉の重ね方をより意識的に行っている初期作品として、『風のある朝に』Ветренным утром という詩がある。<sup>39</sup> この詩はまず、第一連で、

Ветренным утром / Утренним ветром / Сад мой запутан / В собственных ветвях

風のある朝に / 朝に吹く風で / 僕の庭は自分の / 枝でよじれてる

<sup>37</sup> 『ばかの学校』における時間の問題について、これまでの研究ではあまり重視されてこなかったが、語り手は最後になって、ヴェータに対しそれまでとは違う丁寧で距離をおいた言葉で、小説全体を通して語り手がこだわってきた「愛すること、憎むこと、学校の制度や、自分の環境を厭うこと、そして人の死を厭うこと」のないツツジを、自分たちよりずっと幸せだと語る。ここで「ツツジは死なない、すべての自然は死なない」と言うとき、語り手はそれまでと変わらず〈不死〉についての思いを巡らせているのだが、それはかつて、一人の人間の復活を願い、時間の逆行を主張していた時とは全く違う、穏やかで大きな視点に切り替わっている。

<sup>38</sup> 例：«...кто там та где там там там Вета ветла ветлы ветка там за окном в доме том...» (次頁参照)

<sup>39</sup> Александров С. Ветренным утром // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 1 мая 1968. С. 4. (以下、この詩の引用は全て同頁。) ソコロフが С. Александров という署名も併用して用いていたことは、バートン・ジョンソンも述べている (Johnson, “Sasha Sokolov,” p. 206.)。しかしジョンソンの主張では、ソコロフが Александров という署名を用いたのは、「同じ新聞社の上司に同姓のソコロフという上司がいて、その上司が、部下と同姓であることを気に入らなく思ったため」となっている。だがこの詩に関して言えば、先ほど挙げた短編『入隊』と同じ号の同じページに並んで掲載されていて、片方は А. Соколов、片方は С. Александров となっている。どちらも内容的に明らかにソコロフ本人の作品であり、上司との関係のせいであれば、ソコロフ名義と並んでいるのはおかしい。執筆者の少ない地方紙で一人二役をこなしていたとも考えられるのだが、他の号ではあきらかにひとりの人間が書いた関連性の高い二つの詩に、一つの題名を付けて同じ枠の中に並べ、そのうち片方は А. Соколов、もう片方は А. Сашин としていて (Соколов А., Сашин А. Баллада прилива. // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 7 марта 1968. С. 4), こちらは同一人物であることが一目瞭然だ。ここには名前をもじって遊ぶという、ソコロフらしい遊び心が発揮されていたと考えたほうがいいのかもわからない。

と、風のある朝を歌ったあと、辺り一帯や田舎道を描写する。最後の二連は夕刻になり、

Но день на исходе — / Я ветренный вечер. / А если угодно — / Вечерний ветер. // Ветренным  
вечером, / Вечерним ветром / Саду выкручены / Руки — ветви.

だけど日も暮れるから / 僕は風のある夕暮れ / そうじゃなかったら / 夕暮れ時の風でもいい  
// 風のある夕暮れに / 夕暮れ時の風で / 庭に絡まるのは / 枝の両腕

と、風のある夕刻で詩が終わる。夜 **вечер** と風 **ветер** と枝 **ветвь** を重ねた音を詩にするこの作風は『ばかの学校』にそのまま受け継がれている。また、テーマを見ると、『ばかの学校』と共通するのは風や枝だけではない。第二連、

Девчонкой доверчива / Роза рассвета, / Уйду я до вечера / В пленники к лету.

女の子みたいに純真な / 夜明けのバラ / 夕暮れまでに僕は / 夏の虜になりに行く

朝のバラに少女の純真さを重ねる部分は、ローザ・ヴェトロワの原型とも考えられる。また、第四連と第五連では、

Веселая просека, / Гулкая чаша, — / В тропинку вдоль сосенок / Вдруг превращаюсь.

Зайду я напиться / В другую деревню / И стану колодцем / Глубоким и древним

楽しい空き地 / ざわめく森の中 / 松の並ぶ細道に / 僕は突然姿を変える // となりの村に寄  
って / ごくごく水を飲もう / そして井戸になるんだ / 深い古井戸になるんだ

と、突然そこにある細道に身を変え、さらには古井戸に変身してしまう。何かに身を変えること、とりわけこのような身近な周囲の景色や道への同化は、リポヴェツキイが「メタモルフォーゼの詩学」と呼んだ、『ばかの学校』内の重要なテーマのひとつにもなっている。

### 3. マリ詩人とソコロフ

#### 3-1. 歌う列車と12歳の男の子 —— 『列車にて』

ソコロフは1968年8月までマリ自治区モルキ地方の「コルホーズナヤ・プラウダ」紙に随筆や短編を書き、そのうち数編は同紙より規模の大きい地方新聞「マリ・プラウダ」紙 «Марийская правда» に再掲載された。ソコロフはその後も各地を転々としながら基本

的には少数の地方新聞を中心に作品を発表するのだが、1969年3月から1971年9月にかけては、モスクワから大部数で発行されていた週刊新聞「文学ロシア」《Литературная Россия》の記者として、主に書評や文学博物館のルポルタージュなどを中心に、記事を書いている。

その「文学ロシア」紙記者時代の最後に書いたマリ語の詩に関する記事<sup>40</sup>でソコロフは、ミクライ・カザコフの、『列車にて』《В поезде》（マリ語原題《Поездыште》<sup>41</sup>）という詩を絶賛している。

記事はまず、「僕は明日マリ自治区を去る」という内容の物語調の文章で始まり、マリの風景を描写する。そして「僕は最近ずっと、最近出版された『鶯の泉』Соровиный родник<sup>42</sup>を持ち歩いては読んでいる」と、マリ語で書かれた詩のロシア語訳アンソロジー『鶯の泉』の紹介をする。ソコロフはここで特に優れたマリ語詩人としてミクライ・カザコフの名を挙げ、特に好きだというある一つの詩を、次のように紹介している。

おそらくその詩は他のどの詩より、抒情詩人[ミクライ]カザコフの姿を、その彩色の素晴らしさを表しているかもしれない。僕は、この詩を思い出すと（大抵、列車に乗ると思い出すのだが、それもそのはず、『列車にて』という題名の詩なのだ）、何か秘められた、カザコフの才能の中にまだ眠っている何かがあることを思わされる。すぐに、その特徴を正確に表す言葉を見つけるのは難しい。何物にも縛られないと言っても良いかもしれないが、いや、それよりも広い意味の言葉がいるだろう……<sup>43</sup>

ソコロフが1970年当時、列車に乗る度に思い出していた詩とは、どのような詩だろうか。ここで、ソコロフはその詩から数行を引用する。

列車は小声で歌ってる。両側には / 物静かに考え事をする森が広がる / クンディシ川をあとにして スロク村を過ぎ / どんどん新しい乗客が増えていく……<sup>44</sup>

<sup>40</sup> Соколов А. Познать природу тетивы // Литературная Россия. № 37. 10 сен. 1971. С. 18.

<sup>41</sup> Казаков М. Шумбел мландем. Йошкал-Ола. 1962. С. 52-55.

<sup>42</sup> Соловиный родник. Антология марийской поэзии. Йошкар-Ола. 1970.

<sup>43</sup> «Быть может, оно [стихотворение] как ни одно иное, дает преставление о Казакове- лирике, мастере колорита. Когда я вспоминаю его (обычно это случается в поезде, ибо вещь так и называется — «В поезде»), то начинаю размышлять о каком-то потоенном, почти нераскрытом еще казаковского таланта. Сегодня мне трудно дать определенное имя этому свойству. Оно близко раскованности, но шире ее…» Соколов. Познать природу тетивы. С.18.

<sup>44</sup> «А поезд тихо напевает. С двух сторон / Леса стоят в спокойном размышлении, / Остался Кундыш, промелькнул Сурок, / Все больше и больше новых пассажиров…» Соколов. Познать природу тетивы. С.18.



原文は、12連81詩行からなる比較的長い詩で、ソコロフが引用しているのはその詩の中盤辺りだ。列車が小声で歌う、という表現に注目しよう。『ばかの学校』に登場する列車は、いつも歌うようなリズムで揺れ、語り手はそのリズムに合わせるように叙述を始める。

もちろんたたこう タンバリン たんたん 列車の デッキに いるのは だんだん だ  
あれ 易しくて 楽しい 歌を 葦の笛で奏でます 鉄道路線の エダの ヴェータ ガタ  
ンゴトン ガタンゴトン (中略) 太鼓はそりゃあ 打てばいい トトン トン トン (中略)  
うとうと してたら 突然 誰かが 歌っているのが 聞こえた気がした……<sup>45</sup>

と、タンバリンや葦の笛の音、<sup>46</sup> 太鼓の音を重ね、列車のリズムに幾度となく歌のイメージを重ねている。また、ミクライ・カザコフの『列車にて』からソコロフが引用した部分の最後は、12歳の男の子が乗ってきて終わる。この12歳という年齢は、ヴィーチャ・ブリヤスキンの名前の由来となった聖者伝のヴィトウスの年齢とも重なる。

これ以前のソコロフ初期作品に列車が全く登場していないことや、この記事が書かれたのがソコロフの新聞記者時代の最後のほう、つまり『ばかの学校』が書かれ始めた頃にあたるということとあわせて考えても、ミクライ・カザコフの『列車にて』が、『ばかの学校』における列車に、何らかの影響を与えた可能性は否定できない。

### 3-2. 長生きを予言するカッコウ

ソコロフとマリの詩人たちとの交流の重要性を現す初期作品はこれだけにとどまらない。ソコロフが初めてマリの詩人についての記事を書いたのは、「コルホーズナヤ・プラウダ」1968年3月30日号だ。<sup>47</sup> モルキ地方の中学校にマリの詩人ヴァレンチン・コルンブ(1935-1974)が来訪したことについての記事で、ソコロフが実際に現場に出向いて取材した様子が伺える。

1968年3月というのは、ちょうど、СМОГ 解散以降は随筆と短編ばかりを発表してき

<sup>45</sup> «...а тамбурин конечно же бей кто в тамбуре там та там та там там простая веселая песенка исполняется на тростниковой дурочке на Веточке железной дороги тра та та тра та та...а барабан естественно бей тра та та (...) задремал и слышу вдруг не то поет кто-то не то не та не то не та...» (С. 14.)

<sup>46</sup> 葦の笛はもちろん тростниковая дудочка だが、その「笛」を、綴りと音のよく似た「ばかな娘」だурочка とすることで、次の「ヴェータチカ」に繋げている。

<sup>47</sup> Соколов А. Встреча с поэтом // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 30 марта 1968. С. 2.

たソコロフが、詩も発表するようになる時期だ。数編の自作の詩の発表を経て、ソコロフは、「コルホーズナヤ・プラウダ」同年8月3日号で、ヴァレンチン・コルンブの詩3篇の露訳を担当している<sup>48</sup>。原文はマリ語だ。もっとも、その号に発表された3篇の詩以外には、ソコロフがマリ語からロシア語に翻訳をした記録は後にも先にも見られないことや、3月からコルンブ本人と交流のあった可能性も高いということ、また、コルンブ自身がロシア語をかなり出来たということなどから判断すると、ソコロフがどの程度マリ語を習得していたかということに関しては疑問が残る。だが、ソコロフが当時マリ語と接していたこと自体は確かだ。先ほどの「文学ロシア」における紹介でも、ミクライ・カザコフの『列車にて』を、マリ語の詩的言語の多大なる資質を証明するものとして高く評価している。<sup>49</sup>

また、『ばかの学校』においては、カッコウが語り手に長生きを予言した箇所<sup>50</sup>を挙げたが、「Колхозная правда」紙上でソコロフが訳した В. コルンブの詩には、

Быть может, кукушка в лесу куковала, / Сто лет обещала: ку-ку ку-ку, / А может быть, сердце мое тосковало / По дому родному: тук-тук тук-тук.

カッコウが森で、鳴いてたかもしれない / 100年生きると予言して、カッコウ、カッコウ / だけど僕の心は切なかったかもしれない / 自分の家を懐かしんで、トントン、トントン

К сердцу так близко кукушкину грусть. / Когда мое сердце слышит кукушку, / Оно, как птенец из гнезда – на траву, / А я прилетаю домой и в окошко / Стучу, задыхаюсь: тук-тук, ку-ку..

カッコウの哀しみがわかるよ / 僕の心がカッコウの声を耳にすると / 心はまるで巣から落ちたひな鳥みたい / 僕は家に飛んで帰って、窓を / 叩く、息を切らして、トントン、カッコウ.....<sup>51</sup>

といった箇所があり、カッコウが森で長生きを予言してくれたこと、またそれにもかかわらず、自分は寂しさや切なさに満ちていたこと、窓を叩く音、と、『ばかの学校』と重なる部分は多い。

だが、マリの詩とソコロフの繋がりを考えるにあたっては、こういった直接的なテーマ

<sup>48</sup> Колумб В. Стихи. Соколов А. (пер.) // Колхозная правда. Морки. 3 авг. 1968. С. 4.

<sup>49</sup> Соколов. Познать природу тетивы. С.18.

<sup>50</sup> このエピソードは、森の中でカッコウに「カッコウさん、カッコウさん、僕はあと何年生きられる？」と訊くと、生きられる年の数だけ鳴いて答えてくれる、というロシアの言い伝えに基づいている。

<sup>51</sup> Колумб. Стихи. С. 4.

のみに限らず、視野をもう少し広げて、社会的背景にも目を配ってみる必要がある。そもそも、大手「文学ロシア」紙が一頁を丸ごと裂いてマリの詩人たちに関する記事を書いたのは、この記事が掲載された当時、とりわけ詩の世界において、「ロシアの各地方の特色をもった文学作品を公の文学にも取り入れよう」という動きが背景にあった。これを考慮に入れると、事の真相がだいぶ見えてくる。

1960年代という社会的背景のなか生まれた、詩の世界で地方を描く潮流「静かな抒情詩」тихая лирикаの動きが本格的に活発化するのには、1967年にニコライ・ルプツォフの詩集《Звезда полей》が出版されて以降だ。この潮流は常に、公の主流派詩人達を書く詩「大きな（主流の）抒情詩」громкая (эстрадная) лирикаと対比され、政府側の見解としては主流詩人たちと比べると彼らは一段格が下がる、というような位置づけがされていた。<sup>52</sup>

先ほども触れた、ソコロフが新聞記者になる前に所属していた文学サークルСМОГは、そもそもこの社会的規範とされる主流派に対する反発から生まれ、自らをアヴァンギャルド運動と称した新しい文学を求める活動であった。メンバーは高校生や大学生がほとんどで作品の傾向は多様だったが、当時公に認められていた詩にはないものを志向する姿勢は共通していた。そのСМОГの弾圧、解散を経て、比較的自由に作品を書ける地方紙を選んだソコロフが、主流派詩人にささやかではあるが当時「公に」対抗できるほとんど唯一の手段だった地方の詩に、期待をかけていた可能性は高い。とはいえ、社会的枠組みのみに焦点を当てただけでは、その結果、その「地方の詩」の何がソコロフ作品に影響したかということまではわからない。

もうすこし具体的に見てみよう。注目すべきは、地方を描いているとはいえ、もともとロシア語で詩を書いていたニコライ・ルプツォフらが、古典的なロシア詩法にのっとり、詩形だけで見れば公の詩人達よりずっと保守的な形式で書いていたのに対し、マリ語からロシア語に訳された詩の場合、当時出版されていた詩集をざっと集めてみても、どれも詩形や詩連の数、脚韻に至るまで、形式はまったくと言っていいほど自由だったということだ。それらに見出せる形式上の詩的要素は、擬音語の繰り返しやアナフォラ、類音反復、

<sup>52</sup> 論旨と直接は関係しないが、特筆すべきことがある。それは、2000年代に入って、再びこの対比が強調されるようになったことだ。現在モスクワで出版されている、高校生向けの文学史の教科書では、この二つの潮流を並べての紹介に際し、「静かな抒情詩人たち——ニコライ・ルプツォフやウラジーミル・ソコロフら——の詩が優れていることは認めるが、この潮流には弱点がある。〈主流〉詩人たち——トヴァルドフスキイやイサコフスキイら——のとりつた市民的・社会的立場から逃げるような姿勢をとった〈静かな〉抒情詩人たちは、〈大きな〉国家思想の高みにまでは達しなかった。確かに、彼らは〈静かなふるさと〉を見出した。しかし、そこには、強大な力を持った偉大なる大国は見出せない」といった言説が繰り返されている。(Чалмаев В.А., Зинин С.А. Литература XX века: Учебник для 11 класса. В 2 ч. Ч. 2. М. 2007. С. 223.)

言葉そのもののリズムといった、民衆詩にも近い素朴なもので、ロシア詩法の持つ形式に対する厳格さは見られない。先ほど挙げた『列車にて』にしても、冒頭こそ、4行にまとまった詩行(詩行の長さにはばらつきがある)が2つ並んでいるものの、その後の詩連は、9行であったり、10行であったり14行であったりと、内容の切れ目をそのまま詩連としているだけで、それ以外の規則性はあまり見られない。

一方、『ばかの学校』もまた、こういった擬音語、類音反復、言葉のリズムといった要素に非常に富んでいる。形式上は散文の相を呈しているようでもあるが、音に対する敏感さは、作品全体を通してどの箇所を見ても詩の基準に達すると見て間違いのないことは、これまでも度々指摘されてきた。<sup>53</sup> また、それこそが、ナボコフやベールイにも通じる言語実験の文体で書かれているといわれるゆえんでもある。

ここで最初の問いに戻って、現段階なりの答えを出してみよう。ソコロフが亡命後に、ナボコフの言語感覚に近い、いやベールイに近い、など様々な指摘をされる要因となった二つの要素、すなわち、通常のロシア語にはあまりない不思議な語順の語りや、擬音語、類音反復、言葉のリズムや意味の類似に対する強いこだわりといった特徴の原点を、ナボコフでもジョイスでもボルヘスでもベールイでもない何かに見出すとすれば、ソコロフが自らの作家人生をはじめの時期に、マリ語という、ロシア語とは別の文法構造、語順、そして詩の世界を持った言語と深く関わっていたという事実が浮かび上がってくる。

ロシア詩と共通する詩形の法則性がほとんどないのにもかかわらず詩として成り立っているマリ原語の訳詩と、散文のような形式でありながら詩的言語感覚に満ちているソコロフの散文は、その書き方から、言い伝えのカッコウや風や木々を主役にしてそこに詩情を見出す姿勢までが、非常に良く似ている。ただし、先ほども述べたように、これを言語間の影響として検証していくにはまた別に研究が必要になる。また、先ほども述べたように、ソコロフがどの程度マリ語を習得していたかという点については疑問が残ることもあり、マリ語という言語そのものの影響として検証することの難しさは否めないだろう。

『ばかの学校』は、川端康成の引用から、ピオネール手帖、アヴァクムの引用まで、実に様々なテキストを地の文体に融合させているし、ソコロフ本人がカーリーニン地方の話し言葉の影響を認めていた『狼と犬の間』もやはり引用が多く、それが一つの手法のようになっている。そういったことも含め、『ばかの学校』の作風はこれまで、ソヴィエト文学とはかけ離れた異色作と捉えられることが多かった。確かにそれは、当時のソヴィエトで公に推奨されていた文学のみと比較すれば、あながち間違っているとは言えない。だが一方でその見方には、1960～70年代前半のソヴィエト文学というものを、一面的に捉えす

<sup>53</sup> 例：Кременцов Л.П., Алексеева Л.Ф., Малыгина Н.М. и др. (Глава о С.Соколове – М.Л. Кременцова.) Русская литература XX века: В 2 т. Т. 2. М. 2005. С. 354.

ぎている危険性も含まれている。

もちろん、単純に『ばかの学校』を、ソヴィエトの文学潮流にあてはめようというわけではない。ソコロフの作品は、ソヴィエトの文学史という枠組みの無条件な反映ではない。しかし、より広い意味での歴史的条件—すなわち、非公認とはいえソヴィエト国内に確かに存在した文学サークル СМОГ での経験や、新聞記者時代に得たドキュメント的要素<sup>54</sup>や、マリ語の詩など—の意識的な反映と捉えることはできる。そして、そこに目を配った時に初めて、それらを貪欲に取り込み、様々な文体やテーマを作品に生かしている、ソコロフ作品の新たな一面が浮き彫りになるのではないだろうか。<sup>55</sup>

ソヴィエト在住時代に、ソコロフがユーリイ・カザコフを好んで読んでいたことは既に述べたが、実は、現在わかっているこの潮流とソコロフとの関連はこれだけではない。「文学ロシア」記者時代、ソコロフはある三人の作家の似顔絵を書いたことがあった。<sup>56</sup> その一人目が他にもない、「抒情的散文作家」の筆頭に挙げられるオリガ・ベルゴリツ、それから詩人のレオニード・マルティノフ (1905-1980) と、レフ・オシャーニン (1912-1996) だ。

ジャンルの面だけから見ても、オシャーニンのバラード小説や、マルティノフの韻律のない長詩、そして、ベルゴリツの抒情的散文は、ソコロフの意図した「詩的散文家」と共通する面も多い。<sup>57</sup> だが、そういったことをきちんと検証するためには、まだ専門的研究の少ない抒情的散文の書かれ方そのものを、ロシア詩史全体を視野に入れた上で明確にしていかなければならない。この具体的な検証は、やはり今後の研究課題となるだろう。

<sup>54</sup> 本論では扱わなかったが、マリの地元の小学校の教師にインタビューを行い、小学生の休み時間の活気を描いた『休み時間のシンフォニー』という記事がある。小学校の休み時間に、子供達が騒ぎ、走り回る様子をを音楽に例えている。『ばかの学校』にも類似した休み時間の描写がある。(Соколов А. Симфония больших перемен // Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 3 фев. 1968. С. 2-4.)

<sup>55</sup> 「抒情的散文」は、1960-1970年代のソヴィエトの散文に用いられる場合、オリガ・ベルゴリツの『昼の星』(1959)以降、コンスタンチン・パウストフスキー (1892-1968)らの潮流から、それを受け継いだユーリイ・カザコフ (1927-1982) や、ウラジーミル・ソローヒン (1924-1997)らによって書かれた作品群を指す。研究の分野ではバリブロフの著書『抒情的散文の詩学』(Бальбуров Э.А. Поэтика лирической прозы (1960-1970-е гг.). Новосибирск. 1985)等に見られるが、ただし現在のロシア文学研究全体から見れば、「抒情的散文」という言葉は、あくまでもこの時代のこの潮流を表すためのものとして用いられているだけで、厳密な学術用語として定義が確立されているわけではない。

<sup>56</sup> Соколов А. Дружеские шаржи // Литературная Россия. № 13.27 марта 1970. С. 24.

<sup>57</sup> ソコロフは、学生時代から好んで自らを、прозаик と поэт をかけあわせた「詩的散文家」Прозэ と名乗っていた。参照：Алейников В.Д. Лишь настоящее.. М. 2010. С. 645.

## Неизвестный Саша Соколов — Ранние рассказы в провинциальных газетах —

НАГУРА Юри

Актуальность исследования состоит в том, что впервые подробно рассматриваются самые первые, ранние произведения Саши Соколова (тогда еще подписывавшегося «А. Соколов»), которые он публиковал в провинциальных газетах со второй половины 1960-х до начала 1970-х годов (по меньшей мере, таких произведений 60). В ходе написания настоящей работы были найдены новые материалы, тесно связанные с его романом.

### 1. Библиографические находки

До сих пор считалось, что до эмиграции Соколова роман «Школа для дураков» не был опубликован нигде. Но рассказ «В армию», который является первым рассказом из второй главы романа, был опубликован в 1968 г. в местной марийской газете (Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 1 мая 1968.С.4.). Кроме того, часто пишут, что его “литературный дебют – рассказ «За молоком» в газете «Новороссийский рабочий» (1967)”, (Энциклопедия«Литература и язык»2007.)<sup>1</sup> но на самом деле «За молоком» был опубликован в другой газете. (Колхозная правда. Морки. Марийская АССР. 12 декабря 1967. С. 4.) К тому же этот рассказ трудно определить как дебютное произведение, так как Саша Соколов и до этого действительно писал очерки в газете «Новороссийский рабочий». В одном из них найдена скрытая цитата из запрещенного стихотворения Леонида Губанова, который вместе с Соколовым участвовал в литературном кружке СМОГ.

### 2. Тематические и стилистические связи с романом «Школа для дураков»

Во многих ранних произведениях и статьях можно увидеть параллели с романом «Школа для дураков». Некоторые из них касаются стилистики (обращение к себе как к «тебе», игра слов «ветки ветел», «ветреным вечером», частое использование обращения «помнишь»), другие же носят тематический характер (крики кукушки, обещающей долгие годы, с грустью слушающий их одинокий «я», понятие времени как не существующее вне человека, тихо напевающий поезд, мальчик, сидящий в том же поезде, «девчонкой доверчива Роза рассвета», превращение в дорогу, колодец и т. д.). Также важны марийские поэты, высоко оцененные Соколовым. Писатель рождается не сразу. Раннее творчество Саши Соколова наглядно показывает нам становление мастерства молодого писателя, которое полностью реализуется позже, в его романах.